

「よくやった」「褒めたい」

県外出身選手の親 スタンドで応援 わが子の成長実感



八戸学院光星ナインの試合を見守る選手の保護者ら＝12日、阪神甲子園球場

光星甲子園2回戦敗退

八戸学院光星が全国高校野球選手権大会2回戦で愛工大名電（愛知）と対戦した12日、甲子園球場一塁側アルプスでは、ナインの保護者が勝利を祈ってプレーを見守った。「本当によく頑張った。試合には敗れたものの、青森県外出身選手の親は、故郷から遠く離れた八戸で成長したわが子の活躍に目を細めた。

初戦で先発した渡部和幹（東京都出身）の父剛さん（48）は「小学生の時に甲子園での試合を見て『光星に行きたい』と言ったの思い出す」と振り返り、「夢がかなったのは努力があったこそ。褒めてあげたい」と笑顔を見せた。

昨秋、腰のヘルニアを発症し、約4カ月間、競技から離れた池上智史（神奈川県出身）の父竜一さん（55）も「ここまで来たのが本当に信じられない」と感慨深い表情を浮かべる。

腰の調子が上がらないことと5月ごろに「野球をやめたい」との連絡を受け、「家族はメンバー入りを諦めていた」という。それで



八戸学院光星高

「自分らに力くれた」

留守部 ナインの健闘ねぎらう

ンバーに名を連ねた。「本府出身の父重敏さん（52）と母千代美さん（48）は「八戸はあまりにも遠いので心配したが、本人がどうして張った、文元磨生（大阪）も光星に行くと言うので背話した。」

中を押ししたと、当時を回想。「負けたのは残念だが、大阪に帰ってきたらお疲れさまと言っておきたい」と話した。

八戸学院光星が夏の甲子園2回戦に臨んだ12日、八戸市の同校オーブンスペー

スでは、女子バスケットボール部員ら約50人が映像でナインの戦いぶりを見守った。チームは延長の末に悔しいサヨナラ負けとなったが、留守部隊は「粘り強い戦いを見せてくれた」「みんな頑張っていた」とナインの健闘をねぎらった。

五回に先頭の佐藤航太が左越えに滞空時間の長い飛球を放って三塁を回った瞬間、同スペースでは映像画面が消えるハプニングが発生。復旧するとチームが勝ち越していたこともあり、ドットと盛り上がった。集中打で3点を加えた七回には、安打、適時打のたびに試合終盤、祈るような表情で戦いぶりを見詰めた女子バスケットボール部員ら12日、八戸学院光星高

メガホンをたたく音が大きく鳴り響いた。追い付かれた終盤は緊迫した展開となり、留守部隊も常に祈るような表情で画面を見詰めた。延長十回に相手のサヨナラの走者が本塁を踏むと、「あー」と頭を抱える生徒も。

女子バスケット部の副島紗和さん（3年）は「追い込まれても粘り強く戦っていた。負けはしたが、10月に全国大会県予選を控える自分らにとって力になる試合をしてくれた」と賞辞。

男子ソフトテニス部の川口光翔さん（1年）は同学年の左腕が先発として力投し、チーム初安打をマークしたことに「1年生が頑張っていたのを励みに、自分らも秋の大会で頑張りたい」と決意を新たにしていた。

（澤田淳一）

光星野球部OB 洗平竜也さん(六戸出身)メッセージ

甲子園息子たちに感謝

12日に兵庫県西宮市の甲子園球場で行われた全国高校野球選手権2回戦で、八戸学院光星応援団が陣取った一塁側アルプスでは、同校OBで元中日ドラゴンズ投手の洗平竜也さん(43)が六戸町出身の若輩の熱闘を見守った。高校時代は3年連続で青森大会決勝に進みながら甲子園には縁がなく、「悲運のエース」とも呼ばれた洗平さん。今夏「聖地」のマウンドに上がった長男の歩人(3年)や次男の比呂(1年)、母校の後輩たちに対する思いなどについて、本紙にメッセージを寄せた。

歩人が甲子園の初戦(岡山・創志学園)で登板し、スコアボードで進んだが、1年の時はそいどに「洗平」の名前が表示された時は胸に迫る感情と同時に、うらやましい気持ちもあった。

僕は中学校の時、強い高校に行きたくて、光星が県内の別の私立かで気持ち揺れていた。最終的には双子の弟(単人さん)と一緒に野球をさせてくれる光星を選んだ。

略歴

あらいだい・たつや 1979年1月9日生まれ。六戸町出身。光星学院(当時)―東北福祉大卒。本格派サウスポーとして活躍し、大学卒業後にプロ野球中日に入団。社会人野球チームを経て2007年シーズンに現役引退。過去には、千葉県の少年野球チーム「二和タイガー」で監督を務めた。高校時代は3年連続で夏の青森大会決勝に進んだが、甲子園出場はかなわなかった。

特別な舞台、胸に迫る感情



選手の粘り強さ強い証拠

チームは個々のレベルが高く、みる。今は青森大会もレベルが高くなって助け合ってプレーしていくと驚いた。特に聖愛の葛西(卒)

生)君は球質がすごく良い。プロに行っても球が出るかもしれない。光星では、同郷の織笠(陽多)君にも頑張ってもらいたい。六戸出身でプロ野球選手になったら僕以来かな。

何か運命的なものを感じた。僕は高校1年の時に背番号が15番で、東奥義塾と対戦した。比呂が同じ背番号で東奥義塾で投げたのも、不思議な巡り合わせだったように思う。

自分が来られなかった甲子園に連れてきてくれた息子たちには、本当に感謝している。甲子園の舞台に立ったのは紛れもなく2人が頑張ったからだ。

負けてしまったが、光星ナインは最後まで諦めない姿勢だった。こういう試合ができるのは今の光星が強い証拠。歩人は主将という役割をしっかり果たしている、比呂もよく投げた。比呂はまだ1年生。これからもっと力を付けて、またこの舞台に戻ってきてほしい。

八戸学院光星ナインにエールを送る洗平竜也さん